筑波大学附属駒場中・高等学校研究報告　第34集　1995年３月

古典授業におけるいわゆる過去の助動詞「き」の扱い方について

筑波大学附属駒場中・高等学校　国語科
福田　　孝

古文授業におけるいわゆる過去の助動詞「き」の扱い方について

筑波大学付属駒場中・高等学校
福田　孝

平安時代の和文の作品を扱っていく際に，過去の助動詞として理解し対処するものに「き」と「けり」とのふたつがある。本考察では「き」に焦点をしぼって「き」をめぐる諸現象について論を提示し，授業において平安期の作品を読むさいに「き」をどう扱うべきなのかを提示したい。また「き」を扱うことは，その語り手・書き手が語る内容・書く内容をどう提示しようとしているかという問題，いわゆる「語り」の問題にも関係してくる。その方面を射程に入れるための基礎的な考察をも行いたい。

一

「き」の意味用法をめぐる考察にはさまざまなものがある。そのおおまかは二つの流れにまとめ得るように思う。すなわち，回想というにせよ記憶というにせよ，述べ手が自己の直接に経験した過去の出来事に関して用いられるという説（以下，直接体験過去説とよぶ）と，自己の体験・非体験とに関わらず単純に過去に生じた出来事を述べる際に「き」が用いられるという説（以下，単純過去説とよぶ）と，である。

前者の説は山田孝雄によって先鞭をつけられたものである（『日本文法論』1908宝文館），「この『き』は従来過去をあらはすものと称せられたり。然れども，こは過去をあらはすといふよりも，過去時にありし出来事を心内に回想したるその回想作用を言語にて発表したるものなり」。松下大三郎も「『き』は事件を主観化して表すから，同じ過去のことを云っても自己の確実な記憶として云ふのである」と述べる（『改撰標準日本文法』1928中文館，現在は勉誠社）。そして英語学者細江逸記によって「『き』は『目睹回想』で自分が親しく経験した事柄を語るもの」（『動詞時制の研究』1932泰文堂）として提出されて以降にこの説は定着し，今日でも大野晋によって「キは事件について自己の記憶に確実であることを示す」と改変されつつ（「日本人の思考と述語様式」1968「文学」36巻2号），広く受け入れられているように思われる。

これに対して後者は，橋本進吉によってギリシャ語のアオリストに該当するものとして提出され（『助詞・助動詞の研究』1969岩波書店），山口明穂などよって「『き』は，過去の出来事，そ

して，それが，話手のいる，今という時点では失われている，それへの思いをこめた語ということができる」と強く支持されている（「時の助動詞―「き」の意味―」1991「国語展望」89，他に鈴木泰「『き』『けり』の意味とその学説史」1984「武蔵大学人文学会雑誌」16-3のち『古代日本語動詞のテンス・アスペクト―源氏物語の分析―』1992ひつじ書房に所収，など）。

二

まず直接体験過去説・単純過去説それぞれが論拠にする資料を確認していきたい。

直接体験過去説の「き」の理解を補強するために中世期の資料もしくは中世に近い時期の資料がよく用いられる。

1　また撰者の歌を入るる事書には「いづれの時よみ侍りし」と書くべし。「し」の字を必ず置くべし。さらぬ人の事書には「よみ侍りける」など書くべし。これ一節ある故実なり。もし人にも知られぬ私集などを撰び置きて侍らんをば，のちに人の見て此の集の撰者は此の作者にてありけりとみらるることも，この「し」の字の変はり目なるべし。

『愚秘抄』下

2　月の夜，中納言定頼が許につかはしける　　弾正尹清仁親王

板まあらみ荒れたる宿の寂しきは心にもあらぬ月を見るかな

月をこそみれとありけるにや，これにては，久しきにてやあるべからん。その夜かへしはなくて，二三日ばかりありて雨降りける日，みこのもとにつかはしける

定頼卿

雨降れば閨の板まもふきつらんもりくる月はうれしかりしを

心はいはれたり。ただし嬉しかりしをや，我ことの様ならむ。…

『難後拾遺抄』第十五雑一

3　後徳大寺の大臣の，寝殿に，鳶ゐさせじとて縄をはられけるを，西行が見て，鳶のゐたらんは，何か苦しかるべき，この殿の御心，さばかりにこそ」とて，その後はまゐらざりけると聞き侍るに，綾小路宮の，おはします小坂どのの棟に，いつぞや，縄をひかれたりしかば，かのためし思ひいでられ侍りしに，「誠や，烏のむれゐて，池の蛙をとりければ，御覧じ悲しませ給ひてなん」と，人の語りしこそ，『さてはいみじくこそ』と覚えしか。徳大寺にもいかなるゆゑか侍りけん。

『徒然草』十段後半

資料１『愚秘抄』下では勅撰集撰者自身の歌の詞書には「き」を用い，そうでないときには「けり」を用いるといっている。資料２『難後拾遺抄』第十五雑一では，弾正尹清仁親王が月を

見た行為に対して，定頼が歌の中で「うれしかりしを」と「き」を使用しているのを難じている。『難後拾遺抄』筆者も，語り手自身が過去に行った行為に対してでなくては「き」を用いてはいけないと判断しているようである。資料３『徒然草』十段後半は「き」が話者の直接体験に，「けり」が伝聞過去に用いられている好例として引かれるものである。こうした例により「き」は，話者の直接体験の過去に用いられることの根拠とされることが多い。しかし，以上の資料も，それを書いた人物らが日常的に「き」を用いていなかった，すなわち彼らにとって「き」はもはや古語でしかなかったという点において，その主張に全面的な信を置くわけにはいかない。『愚秘抄』筆者や『難後拾遺抄』筆者の時代には「き」の意味がもはや分からなくなっていたからこそ注記が存在するのである（三省堂『例解古語辞典　第二版』「き」の項参照）。また『徒然草』は擬古文で書かれているのである。この三資料は，もはや「き」が日常語ではなくなった時代においてその意味がどう捕らえられていたかを示す，「き」の意味追及の端緒となるに過ぎない。（資料２『難後拾遺抄』の用例は森野宗明氏の御教示による。氏によれば歌論書の類における「き」に関する言及の初出例とのことである）。

単純過去説の「き」の理解を補強するためには平安初期の漢文訓読語における「き」の使用例がよく用いられる。

「この古點に見えるケリは，時に於ては過去でなく殆ど皆現在に用ゐられている。即ち普通に所謂詠嘆の義に用ゐられてゐると言つてよい。……この古點の訓方に於ては，過去の事を述べるには，必ずキ（シ・シカ・シク）を用ゐてケリとは明らかに区別している。……過去の叙述に於ては，其の始の部分に右の如くこのキを用ゐて，中途は現在（歴史的）形にしてあることが普通であるが，その終は必ずキを以てしてあるのであつて，それらが亦ケリになつてゐることも決してないのである」（春日政治『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』1942，波線引用者）。こうした指摘をもとに「き」の意味を単純過去であるとするのである（例えば佐竹昭広「説話の原則歴史叙述と物語叙述」1987『日本文学講座３神話・説話』大修館書店など）。しかし，日本語と元来シンタックス等の異なる漢文を日本語として無理に訓むときに用いられている「き」が，日本語としての「き」の用法を十全に担って用いられているかどうかは疑わしい。また例えば，きわめて狭い，ある種の用法だけを用いている，あるいは代用させているという可能性がある。当時の日本語が，どのように漢文訓読に転用されているか，という大きな平面上で，漢文訓読に使用される「き」を捕捉した上でなければ，「き」の意味追及に，漢文訓読の用法を援用するのはあやうい気がする。例えば大坪併治によって，仏典（特に「経」）では春日政治の指摘通りに「き」が用いられ，仏典以外の漢籍では「き」は用いられず，動詞の原形や完了形が用いられることが報告されている（「説話の叙述形式として見た助動詞キ・ケリ―訓点資料を中心に―」1977「国語学」一一一集）。元来，過去時を述べるための助字を持たず，過去時の明示化は副詞によってなされる漢文を訓み下そうとする際に用いられている「き」は，便宜的なもので，「き」を用いるか否かは訓読をなす人々の間で成り立つ約束事のようなものであっただろう（「過去の

叙述に於ては，其の始の部分に右の如くこのキを用ゐて，中途は現在（歴史的）形にしてあることが普通であるが，その終は必ずキを以てしてあるのであつて」と春日は指摘する。冒頭と末尾に「き」を据えるという，型にはまった用法がこの推測を裏付けるだろう)。その漢文訓読語に「き」が用いられていても，日本語として用いられる「き」の十全な理解に役立つのか否かには不安が残る。

またやはり単純過去説「き」の理解を補強するために用いられるのが，『万葉集』中の用例である。よく根拠として引き合いに出される例は，万葉集十三番歌の大和三山の歌である。

4　香具山は　畝傍ををしと　耳梨と　相争ひき　神代より　かくにあるらし
　　古も　然にあれこそ　うつせみも　妻を　争ふらしき

『万葉集』一13

この歌は単純に考えれば，自己が体験したとは思われない過去時の出来事に対して「き」が使用されている例である。しかしこの「き」を直接体験過去として理解しようとする説も提出されており（小学館版日本古典文学全集頭注・伊藤博『万葉集全注　巻一』1983有斐閣など），確例とはいえないのかも知れない。

5　松浦縣佐用比賣の子が領巾振りし山の名のみや聞きつつ居らむ
　　遠つ人松浦佐用比賣夫戀に領巾振りしより負へる山の名

『万葉集』五868.871

資料５の二首は単純過去説の確かな例とみなせよう。問題は『万葉集』中の「き」の意味用法を今問題にしようとしている平安時代の「き」の意味用法にまで適応することに支障がないかどうかである。確かにより古い時代の用法を吟味すれば，その語の原義に到達することはできようが，そのことと平安時代における「き」の意味用法を探ることとは別問題であろう。例えば，竹内美智子によって，アスペクトを表して「ぬ・たり」などと一緒に元来動詞に最も近い位置で用いられる「つ」が時代が下って中古に入ると連接順位が「き・けむ・らむ・む」などと言った助動詞と同じ位置にまで下がってくる，すなわち意味用法に変化が生じていることが報告されている（『研究資料日本文法６　助辞編（二）助動詞』1984明治書院のちに『平安時代和文の研究』1986明治書院に所収)。この指摘とは事情が異なるにせよ，同じ語であるから，時代が異なっても意味用法が同一であるとは限らない。また歌という特殊な言表領域の使用例であるあたりにも処理慎重でなければならないだろう。

以上から今まで「き」の意味用法追及に用いられてきた代表的な根拠はほとんど扱いを慎重に

しなくてはならないものばかりで，或る傾向・可能性を述べることは出来ても平安時代和文における「き」の意味用法を判然とは定めかねるのが現状である。（ほかにも直接体験過去説の事例として佐伯梅友が提示した『平家物語』巻六「嗄声」「信濃にあんなる木曽路川」の歌い変えのエピソードなどがある。別にまた，古代の文献資料によると単純過去説に，中世の文献資料によると直接体験説に，それぞれ有利な事例を提出できることになるという傾向が指摘できるだろう）。

その中で，平安時代和文における「き」の意味用法を理解するに現在従ってよいと考えられるのは，次の一点に絞られる。

北原保雄が提示している，連体ナリに上接するか，下接するか，による助動詞の分類である（『日本語助動詞の研究』1981大修館書店）。北原は連体ナリに下接することしかできないものは，話し手の主観的な心的態度を担うことの出来るものと位置付け，連体ナリに上接することしかできないものは，話し手の主観的な心的態度を担うことの出来ないものとして位置付けられるとしている。こうして

a 常に「連体なり」に上接するもの　　＝客観的表現
　す・さす・しむ・る・らる・まほし・（たし）・つ・ぬ・たり・り・き
　・（体言たり）・（補助動詞）
b 常に「連体なり」に下接するもの　　＝主観的表現
　む・まし・じ・けむ・らむ・らし・めり・終止なり
c 「連体なり」に上接することも下接することもあるもの
　　＝客観的表現にも主観的表現にもなりうる
　けり・べし・ず・まじ

ということになり，「き」は客観的表現の位置を得る。直接体験過去説を主張する立場の人はその性格付けとして「ムード的要素」といった言葉を使いかねないが，それは出来ないこととなる。しかしこの論も「き」が客観的表現の位置を得るのか，主観的表現の位置を得るのかがはっきりするだけで，直接体験過去説・単純過去説の二通りの説が出てくる事態を収拾する決め手とはならない。

平安時代「き」の意味用法追及には，漢文訓読資料・『万葉集』・中世の文献といった周辺資料を用いるのでなく，当該の時代（さしあたっては九〇〇年前後―『万葉集』以降で仮名文献が本格的に登場するという時期を捕らえるという意味で―から，一〇九〇年前後―この下限は「き」に関する注記の初出と考えられる『難後拾遺抄』の成立年次一〇八七年あたりに従う―を目安として）の文献内での「き」の使用の様相を見定めていくほかないのではないだろうか。

三

平安時代「き」の意味用法追及に関係して，周辺資料を用いるのでなく，当該の時代の文献内での「き」の使用の様相を見定めていくという方向性を持った論及が近年なされている。

まず『源氏物語』の「き」の用法をすべて吟味した吉岡曠の論文があり（「源氏物語における『き』の用法」1977『源氏物語を中心とする論攷』笠間書院），そこには結論として以下の表が掲出されている。

一会話文中・心内語中　　目睹回想が　一九三〇例中　一九〇八例

二地の文中　　九五二例

①体験話法的文脈（作中人物の目睹回想）　　三九七例

Ａ文字通りのもの

Ｂ心情形容詞を伴う文脈

②先行記事を受ける特殊用法の「き」　　二五八例

③語り手の立場からの回想　　二三五例

Ａ光源氏の側近に奉仕した女房を語り手としての，その直接体験

一六一例

Ｂ伝聞した事柄ではあっても語り手が確かだと確信しうる事柄についてのもの

三七例

Ｃ語り手の経歴・地位が具体的につきとめられればＡに属すると考えられるもの

三七例

④例外　　六二例

一は直接体験過去説に基づいた「き」である。吉岡は会話文で用いられている「き」は九十九％弱まで話し手の直接体験過去として処理できるという。二①も地の文ながら一にちかい「き」である。二②は再述用法（物語の中で一度述べたことにもう一度言及する際に用いられる）と考えられるものである。特殊用法としていて吉岡は触れていないが，「き」の再述用法は桜井光昭（「回想の助動詞の用法」1955「国語学」第23集）が言及しているものである。この「き」は物語の中で一度述べたことに，もう一度言及する際に用いられるものである。

6　「大伴御行の大納言は，我が家にありとある人集めて，のたまはく……龍の頸の玉取りにとて，いだしたまふ。……各々，仰せ受けたまはりてまかりぬ。」

↓

「つかはし<u>し</u>人は，夜昼待ちたまふに，年越ゆるまで音もせず」

「…いかでか聞きけむ，つかはし<u>し</u>男ども参りて申すやう…」　『竹取物語』

ここに見られるように，「いだしたま」うた人について再度言及するとき，「つかはし<u>し</u>人」・「つかはし<u>し</u>男」といった具合に「き」が用いられている。『竹取物語』地の文における「き」は全六例ともこの用法であり，再述の用法と呼べるだろう。これと同じ用法を『源氏物語』に認めた上で，吉岡は「当時の日本語は何よりもまず話し言葉であり，文章語はごく特殊な言語領域であったろうこと，したがって普通の典型的な用法は話しことばの中に見出だされるはず」として，一の会話文中に見られる直接体験過去の「き」を普通の典型的な用法とし，二②の用法を文章語としての特殊用法として，①②を除外したあとに残ったものを，玉上琢也「物語音読論」（「源氏物語の読者」1955『源氏物語研究』角川書店）に基づき，光源氏に近侍した女房の存在を仮定して，出来る限りの用例をその仮定に則って理解しようとする。それが③である。「物語音読論」とは，草子地などを基にしつつ，物語の中に三種類の作者（といっても現実の作者紫式部が物語世界内に想定している作者ということである），すなわち１語り伝える古御達―光る源氏たちを実際に知っている人―（第一の作者），２語り伝える古御達の物語を筆記編集する人（第二の作者），３テキストを読みあげる女房（第三の作者）が，『源氏物語』のなかに認められるという説であり，この三者の発言が混在するのが現在の『源氏物語』の言葉であるというものである。例えば吉岡は「…この皇子三つになりたまふ年，御袴着のこと，一の宮の奉り<u>し</u>に劣らず，内蔵寮，納殿の物を尽くして，いみじうせさせたまふ」という「桐壺」巻冒頭近くの「き」を③Ｃに含め，光源氏の兄「一の宮」の袴着の儀式を体験した女房の存在を措定しようとする。

こうした吉岡の論，とくに③の処理の仕方に対して，糸井通浩が反論を試みている（「源氏物語と助動詞『き』」1981『源氏物語の探究　第六輯』風間書房）。糸井は和歌で使用されている「き」に関する自己の論を基にし（「古代和歌における助動詞「き」の表現性」1980「愛媛大学法文学部論集　文学科編」13），竹岡正夫が提示した「物語中の過去」といった概念（「助動詞『けり』の本義と機能」1963「言語と文芸」31）を使用しながら，吉岡のように②の「き」を特殊とし，残った他の用例を女房の直接体験として処理することに異議を唱える。「き」の基本的性格は「現在時と対比的に認識される過去時を表出する」ことであるから「物語中の現場の現在を前提にしてそれとは異質な状態の時を過去として切り離して認識している」「き」があるのだとして③の用例も語り手としての女房を措定しなくても処理できると述べる。糸井論文に，吉岡曠が再反論を試みてもいる（「「源氏物語における『き』の用法」再論」1991学習院女子短大「国語国文論集」20号）。

吉岡と糸井の論述は「けり」の用法まで含めて細部に亘るので詳しくは当該論文にあたっていただくより仕様がないが，この論争はつまるところ，③の部分を，直接体験過去説に基づいて理解するのか，再述の用法を拡大してその適応範囲を広げる形（すなわち物語の中でかつて扱われ

たことがない事柄でも「物語中の現在」—今現に語られている出来事—以前に起こった事柄に対してであれば「き」が使用され得る）で理解するのか，に関わっている。吉岡は「「源氏物語における『き』の用法」再論」で，直接体験過去説に従う形で「き」の点検をしたのではないと述べるが，「地の文中に見出だされた「き」は，そこでは語り手自身が直接体験したあるいは見聞した過去の事態が，語り手自身によって回想されていることを物語っている」という前提に立ち，草子地を認定する手段として「き」を用いるのが当初からの目的であったのだから，その意味で吉岡は「き」にはモード的な用法があることを前提にして論を進めているといってよい。それに対して糸井は，『大和物語』などの用例二十一例を挙げつつ，物語中で一度述べたことを，再び話題として取り上げる際に「き」が用いられるだけではなく，「物語中の過去」すなわちいま物語で述べている出来事よりも以前に生じた出来事に言及する際に（それはかつて物語中で言及されていない出来事であっても構わない）「き」が用いられると述べている。

吉岡のような解釈が生じてくるのは，玉上の物語音読論を前提とすれば，語り伝える古御達—光る源氏たちを実際に知っている人—が措定できてしまい，直接体験過去として「き」が処理できてしまうからであろう。また『竹取物語』地の文では再述の「き」が用いられているだけで，『竹取物語』からは糸井が言うような，いま物語で述べている出来事よりも以前に生じた出来事に言及する際に（それはかつて物語中で言及されていない出来事であっても構わない）「き」が用いられるという用例は提示されないことになる。

そこで，語り伝える古御達—光る源氏たちを実際に知っている人—が措定できないような作品において，再述の用法とは異なる「物語中の過去」の用例が提示できれば，吉岡の主張は絶対的なものではなくなるであろう。

そのような作品として『宇津保物語』第一巻「俊蔭」巻と，『落窪物語』との，地の文の「き」を確認してみよう。すると，前者では四十三例中三十三例，後者では三十三例中三十一例が再述の用法で処理できる。が，同時にそれでは処理しきれない用例も見出だせる。

7　俊蔭，もとの国なりしときも，心に入れしものは琴（きん）なりしを，この三人の人，ただ琴をのみ弾く。されば添ひゐて習ふに，一つの手残さず習い取りつ。　「俊蔭」巻

8　かくておほやけにもかなはず，官位（つかさくらゐ）も辞して，三條の末京極の大路に，広くおもしろき家を造りて，むすめに琴を習はす。

↓

さはいへど，広かりし所の名残に，無くなりぬとみれど，なほしつらひてあり。父ぬし，物の器用あり，心にくきところありし人なれば，家の様，おかしうおもしろかりしところなれば，…　「俊蔭」巻

9　わが領（りやう）ずる庄々はた多かれど，誰かは言ひわく人あらむ。

↓

父ぬしの言ひしがごと，ところどころの庄より持て来しも，使やりなどしてはたり持て来しときこそありしか，かくむげになりぬれば，ただあづかりの者の喜びにて止みぬ。

「俊蔭」巻

10　二人の婿の装束，いささかなる隙なく，かきあひ，縫はせたまへば，しばしこそ物いそがしかりしか，夜も寝もねず縫はす。　『落窪物語』

11　…といふ声，いとらうたければ，少将の君，なほざりと思ひしを，まめやかに思ひたまふ。

『落窪物語』

7の例は『宇津保物語』開巻まもなくの記述であり，俊蔭が唐に渡ろうとして遭難し，漂着した波斯国で三人の人物から琴の手を習うところである。もと居た国，すなわち日本で「琴」に熱心に取り組んでいたという記述は，物語中でいままで触れられてはいなかった。8・9の例はいずれも，娘への遺言内容が前に述べられていて，それを受けて後の方に，俊蔭死後その娘が生活に逼迫する箇所，が書き出されている部分である。少し見た限りでは再述の「き」と見なされかねないが，先に示した『竹取物語』の再述の用法とは異なっている。『竹取物語』の例では「あの」とか「例の」といった言葉を，再述部分に冠しても解釈に支障ないが，8・9の例では，そうはいかない。「情趣を解するところがあった人であるので，家の様子は趣深く見事であった所であるので」，「所々の庄より持って来たものも，使いを遣るなどして催促したときには持って来たこともあったが」に使用されている「き」は，遺言の内容とは微妙に異なった話を展開する時に用いられている。10・11の『落窪物語』の例もそれまで物語中では述べられていなかった話題に，「き」が使用されている。

以上の用例は再述の用法から外れた例外的な用法と見なすよりは，再述の用法と同じ平面上で処理できるのであればそうした方がよい。「再述」として処理し得る用例も，いま現に述べられている出来事より以前になされた出来事について述べる用例，として説明が可能なのであるから，地の文のほとんどの「き」は，物語のなかでいま現に述べられている出来事より以前に生じた出来事について述べるときに使用されている「き」であると考えられる。したがって，物語中の「き」の用法として「再述」という特殊な用法があるというより，物語のなかで現に述べられている出来事よりも以前に生じた出来事について言及する際に「き」が使用されるのが一般的であるといった方が，幅広く多くの現象をうまく説明しおおせることになる。吉岡が『源氏物語』に関して③の解釈を主張するためには，『源氏物語』のみが当時の物語に比して特異な，例外的な「語り」の様相を持っていたという，『源氏物語』を孤立させる立場を取らなくてはならない。

糸井は『かげろふ日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』の地の文にみられる「き」についても言及している（「王朝女流日記の表現機構」1987「国語と国文学」64-11）。そこでは視点の考え方を提示して，発話時を視座として「できごと」を述べる場合と，素材時を視座として「できごと」を述べる場合，というように自身の論の適応範囲を広げる形で論を進めている。

次に『土左日記』『かげろふ日記』『更級日記』の地の文にみえ，糸井が用いていない「き」の用例をしめすことで，「き」は日記のなかでも現に述べられている出来事よりも以前に生じた出来事について言及するときに用いられるものであることを示したい。地の文の「き」は，『土左日記』に十四例，『かげろふ日記』に百三十二例，『更級日記』に八十例である（ただし『かげろふ日記』中に存疑のものが三例ほどある。たとえば西宮左大臣配流の部分「悲しと思ひ入りしも誰ならねば」。これらは執筆時から見た過去に用いられている用例である。後で述べるように『かげろふ日記』筆者が書き手としての自身を認識した結果用いたものである。また『更級日記』では「乳母なりし人」「継母なりし人」といった，人物を提示するときの「き」は特殊である）。

12　ほとりに松もありき。五年六年のうちに，千年や過ぎにけむ，かたへはなくなりにけり。

『土左日記』

13　来し時は，膝に臥し給へりし人を，いかでか安らかにと思ひつつ，わが身は汗になりつつ，さりともと思ふ気持ち添ひて，頼もしかりき。こたみは，いと安らかにて浅ましきまでくつらかに乗られたるにも，道すがら，いみじう悲し。

『かげろふ日記上』

14　富士の山はこの国なり。わが生ひいでし国にては西おもてにみえし国なり。…

『更級日記』

『土左日記』の用例は二月十六日の条で，京の自宅に戻った貫之が，荒れ果てた自宅の様を見て嘆いているところである。出発前には池のほとりに「生えていた」松が枯れてなくなったものがあるのを嘆じている。『かげろふ日記』の例は，母死去ののち，山寺より母の遺体を連れ帰る場面である。山寺に連れ来たときと対比して悲しんでいることが述べられ，執筆時からすると過去のことである「こたみ」の山寺からの帰還，それよりも過去の「来し時」の出来事に対して「き」が使用されている。『更級日記』の例も帰洛途上を現在として，それ以前の常陸での経験を「き」で示している。

以上によっても「き」は，再述の用法で捕らえるより，いま述べている出来事以前の出来事について述べる用法と捕らえるほうがよい例が他に存することが確認される。他作品では『伊勢物語』で十一例，『平中物語』で七例，『和泉式部日記』で六例，地の文における「き」は全ていま

述べている出来事以前の出来事について述べる用法として処理できる。(この節，付説１・２を参考のこと)

四

次に単純過去説・直接体験過去説を再度検討してみたい。

今まで幾つかの用例を提示しながら論を進めてきた。『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『大和物語』『平中物語』『宇津保物語』「俊蔭」『かげろふ日記』『和泉式部日記』『更級日記』，これらの作品の地の文における「き」について考えてみると，その大概は物語中の現在を基点とする「き」の用法，すなわちいま現に述べている事件中を基点としてそれ以前の出来事について言及する際に用いられる「き」の用法であった(『源氏物語』については全用例が調査できている訳ではないが，既調査範囲内及び吉岡の挙げる用例などから同様のことがほぼ言えると思う)。地の文に関する限り執筆時に基づく，すなわち直接体験過去説に従うような「き」の用例はほとんどみられないということができる。(『枕草子』『紫式部日記』の二作品はこの原則に従わない。本論末尾付説３・４を参照)。

さてそれでは直接体験過去説はどこから生じてきたものだったのであろうか。

英語学者細江逸記が目睹回想説（直接体験過去説）を提示するに当たって使用した用例は次の『竹取物語』「蔵持皇子の話」であった。

15　皇子答へてのたまはく，「さをととしの二月の十日ごろに，難波より舟に乗りて，海の中に出でて，行かん方も知らず覚えしかど……わが国のうちを離れてありきまかりしに，ある時は浪に荒れつつ海の底にも入りぬべく，ある時は，風につけて知らぬ国に吹き寄せられて鬼のようなるもの出で来て殺さんとしき。ある時には，来し方行く末も知らず，海にまぎれんとしき。……」　『竹取物語』「蔵持皇子の話」

ここでは確かに蔵持皇子自身の経験した過去の出来事に「き」が使用されている。いつわりの冒険譚をいかにも実際の体験談として仕立て上げようとしている訳であるから，直接体験過去説には有利であるし，蔵持皇子自身の経験した過去の出来事に「き」が使用されているという事実は，けっして動かない。『源氏物語』「帚木」巻の雨夜の品定めにおける，左馬頭の「指食いの女」「浮気な女」に関する体験談・頭中将の「内気な女（夕顔)」に関する体験談・式部丞の「博士の娘」に関する体験談でも「き」は頻用されている。また『大鏡』において大宅世継や夏山繁樹の昔語りの発言部分でも「き」の頻用は確認できる。すなわちそのいずれもが口頭による「発言部分」なのである。また吉岡が提示する，口頭による発言部分の「き」は九十九％弱が直接体験過去であることが，よい例証となろう。要するに発言部分に置ける「き」の使用の様相が「き」の直接体験過去説の要因となっていることが分かる。

以上からおおまかにいって「き」の用法は，その用例が現われる文章の性格付けに関わりつつ，

大きく二用法に大別されることになる。一用法は日記・物語を問わず，地の文部分において，いま現に述べている事件中を基点としてそれ以前の出来事について言及する際に用いられる「き」であり，一用法は発言部分において自己が直接に体験した目睹回想過去の「き」である。

そうすると「き」についての，単純過去説・直接体験過去説の二つの流れをどのように考えればよいのであろうか。直接体験過去説は，会話文における「き」の用法を考慮する限りにおいて妥当性を得る，がしかし，物語や日記の地の文における，物語中の現在を基点とする「き」の用法については妥当性を得ない。『宇津保物語』「俊蔭」巻のような用例をこの説から説明しおおすのは無理である。単純過去説の方にまだ二用法の説明可能性が残ることになる。そして単純過去説を取った場合にも，どうして会話部分においては自己の体験に限って「き」が用いられ，地の文においては物語中の現在に基づく「き」が用いられることになるのか，の説明を施さなくてはならないだろう。

糸井は「王朝女流日記の表現機構」では前に示したように視点の考え方に基づいて説を展開している。それを図に示すならば以下のようになるであろう。

※会話文中

語り手の発話時

↓

事象　（過去）

※物語・日記の地の文中

語り手の発話時

↓

事象（「物語中の現場」）　（過去）

↓

事象（「物語中の現場」からの過去）　（過去における過去）

会話文中で使用されている「き」は「語り手の発話時」に基点を置いているのに対して，物語・日記中で使用されている「き」では「語り手の発話時」が消え，「事象（「物語中の現場」）」に基点を置いていることになる。しかし，これによっても会話文において自己が直接に体験した目睹回想過去としてのみ「き」が使用されることの説明にはならない。また会話文中における「き」の用法と地の文における「き」の用法とどちらが本来的な用法なのか，あるいは或る本来的な用法が「き」にはあり会話文中における「き」の用法と地の文における「き」の用法ともにそこから派生してきた用法なのか，なども考えなくてはならないであろう。

まず会話文における「き」の使用原理について考えてみよう。

そのために，過去に生じた出来事を口頭において語ろうとする際，当時の人々にとってどのよ

うな選択可能性があったのか，を確認しておこう。

『枕草子』第二十段（以下，段数は新潮日本古典集成『枕草子』による）において中宮定子が紹介する，村上天皇の御代に宣燿殿の女御が古今集の歌を詞書も歌もすべて諳んじていたという挿話，第二百二十六段において「人の語りし」こととして紹介される蟻通し明神の挿話，いずれも人が語ったこととして「なむ」が多用される書き方になっており，清少納言は出来る限り，話し言葉を摸そうとして書き付けたと覚しい。そしてここでは「けり」が基調の話し振りとなっている。

それに対して，第七十七段で中将宣方が前日の夜生じた事件のあらましを清少納言に語る会話部分，同段で夫則光がやはり前夜生じた事件を清少納言に語る会話部分，第七十九段で夫則光が前日生じた事件を清少納言に語る会話部分，これも人が語ったこととして「なむ」が用いられる書き方になっており，清少納言はやはり，出来る限り話し言葉を摸そうとして書き付けたと覚しい。しかしこちらでは「き」が基調の話し振りとなっている。（先に掲げた『竹取物語』蔵持皇子の体験談・『源氏物語』雨夜の品定めの体験談やあるいは『大鏡』大宅世継や夏山繁樹の発言部分も同様の事例である）。

以上の事例から，口頭において過去に生じた出来事を語ろうとする際，当時の人々は二通りの選択可能性を持っていたと考えられる。「き」を基調として用いるか，「けり」を基調として用いるか，である。ただし「口頭において過去に生じた出来事を語ろうとする際」という言い方は適当ではないのかも知れない。「けり」について，語り手の関与しない出来事として使用されていると考えるのが今のところ穏当ではないかと考えている。「けり」は，過去にあったとか過去になかったとかといった意味での〈時制〉には全く関係しないもので，過去の助動詞ではないと考えるからである。（竹岡正夫「助動詞『けり』の本義と機能」「言語と文芸」31・塚原鉄雄「竹取物語の方法」角川書店鑑賞日本古典文学第六巻『竹取物語・宇津保物語』付録など参照。塚原は「助動詞「けり」は，その統括する表現の対象の世界が，表現主体すなわち物語作者と断絶する次元で成立することを規定する表現である」と述べている）。さて会話には，通常，話し手がおり，聞き手がいる。そして時間的にも空間的にも共に存在しているのが通例である。そうした対話の「場」において会話は進行する。つまり話し手と聞き手は同時に現実の対話の「現在」に立っていることになる。その話し手にとっての「現在」とは，現実の対話の「現在」に他ならない。その際において，語の正確な意味においての，話し手にとっての「過去」とは，その現実の対話の「現在」の上に立っての「過去」ということになる。話し手は，対話の「現在」を基点とした上で自分自身にとってまさしく「過去」と呼べるものを，「過去」として語ることになるのである。かつてあったかもしれないかぐや姫の話は，話し手にとってはその意味で過去とは呼べない，話し手にとっては，自身に無関係な或る事件・出来事なのであるから（だから「けり」叙述となる）。かつてあったと人伝えに聞いた宣燿殿の女御の古今集全歌暗誦の事件も蟻通し明神のお話しも，語の厳密な意味においては話し手自身の対話の「現在」にとっては「過去」の出来事でなく，時間軸には関係しない何処か余所（竹岡の用語を借りれば「あなたなる世界」）で

生じた出来事なのである。そう考えると「き」の会話部分における使用原理が明らかになるのではないだろうか。

ここに今まであまり言及されていない奇妙な事実がある。『土左日記』や『かげろふ日記』ではどうして普通の会話文におけるような「き」の使用がなされていないのかという事実である。『土左日記』は，紀貫之が「ある女房」に仮託して書かれたとされている日記であり，その信憑性は高い。「女房」が自分の体験を書き付けた体裁を取るならば，「き」が使用されていて良いと思われる。むしろ「き」を頻用したほうが「女房」の存在証明のためには有利とすら考えられる。『かげろふ日記』は，藤原兼家妻が自己の体験を書き付けたものである。その，自己の体験を述べる（書き付ける）という叙述の在り方からすれば，『竹取物語』蔵持皇子の体験談や『源氏物語』雨夜品定めの体験談と同様な様相を持つ。しかし，藤原兼家妻は『かげろふ日記』を書くにあたり，執筆時を基点とする「き」を用いていない。「き」は話し手の直接体験した過去であるという説を唱える立場からするといずれも奇妙な事態である。先に，口頭において過去に生じた出来事を語ろうとする際，当時の人々は二通りの選択可能性を持っていたことを述べた。物語類はたとえば『竹取物語』に代表されるように口語体を模した「語りの文体」というものを持っている。例えば係助詞「なむ」は会話文によく使用されるものである（宮坂和江「係結の表現価値—物語文章論より見たる—」1956「国語と国文学」29-3・森野崇「係助詞「なむ」の伝達性—『源氏物語』の用例から—」1987「国文学研究」92など）。阪倉篤義は『竹取物語』に関して各挿話の冒頭と末尾に位置する「なむ……ける」に注目して「「なむ……ける」といふ形を持つた表現は，いはゆる「物語る」といふ叙述の様式にとって，正にふさはしいものであり得たのである」（「竹取物語の構成と文章」1956「国語国文」25-11）として『竹取物語』が口語体を指向しようとしたものであることを指摘しているし，その「なむ……ける」を多用した『伊勢物語』や『大和物語』には文の連接上も口で語られた特色が見られること（山口仲美「平安朝文章史研究の一視点—文連接法をめぐって—」1974「国語学」98集のち『平安文学の文体の研究』1984明治書院に所収）も指摘されている。『土左日記』『かげろふ日記』にしても常識的にいわれていることは，これらもやはり当時の話し言葉を基本として書かれているであろうということである。二者択一の選択可能性があるにも関わらず，「けり」の方は日常の話し言葉のあり様に従って物語類が書き付けられる時に使用され，「き」の方は「き」が使用されるにふさわしい条件が存在するにも関わらず，文章語としては使用されなかったのである。これについては，単に記録体の体裁を取る等いくつかの説明が可能であるとが思われるが，本論では以下のように考えている。

文章として書く際でも，消息（手紙）の場合には「き」は使用される。

16　（前略）わがおもとの生（む）まれたまはんとせしその年の二月のその夜の夢に見しやう，（夢の内容）となむ見はべりし。夢覚めて，朝（あした）より，数ならぬ身に頼むところ出で来ながら，何ごとにつけてか，さるいかめしきことをば待ち出でむ，と心の中（うち）に思ひはべしを，そのこ

ろより孕まれたまひにしこなた，俗の方の書に見はべりしにも，また内教の心を尋ぬる中にも，夢を信ずべきこと多くはべりしかば，卑しき懐の中にも，かたじけなく思ひいたづきたてまつりしかど，力及ばぬ身に思うたまへかねてなむ，かかる道におもむきはべりにし。（後略）

『源氏物語』「若菜上」巻にある，明石入道の長い消息である。これには執筆時を基点とする「き」の使用があり，話し言葉に特徴的な，「なむ」と「はべり」の使用が見られる。消息はその意味で会話体に近い有り様を示している。（ただし「はべり」は敬語事象に関わるものであると考えるべきで「はべり」を会話体の指標として良いかどうかは問題がある。阪倉篤義「「侍り」の性格」1952「国語国文」21-10など参照）。『かげろふ日記』『土佐日記』においても当時の口語に範をとり仮名文を書き付けようとするならば，この消息に近い体裁で，「き」を選択する可能性もあり得たはずだが，それはされない。これは話し手が基点とすべき「現在」が措定できないからではないか。『土左日記』では，明らかに紀貫之はこの日記を，手紙を書くように誰かに宛てて書き記しているわけではない。読者として想定されている人物がいたとしても，それはあくまでも読者であって，「わたし」がその日記の言葉を通して話しかけている「あなた」ではない。『かげろふ日記』でもおそらく事情は同じである。「人にもあらぬ身の上まで書き日記して，めづらしきさまにもありなむ，天下の人の品高きやと，問はむためしにもせよかし」という冒頭部分にあるように，記録として書き記すことを重んじていて，誰か特定の「あなた」宛てに書き記したものではないのである。これらの日記の書き手はただ事柄（事件・出来事）を，事柄（事件・出来事）として書き付けるだけであって，誰か特定の読み手を想定して，自己の書き付けつつある「現在」を「現在」としては形作ることはできず，書き付けようとする事柄がただあるだけなのである。

また，『かげろふ日記』においては「物語中の現場」に基づく「き」の使用が目立つが，執筆の現場に基づく「き」と思われる次のような箇所もある。源高明左遷の条である。

17　そのころほひ，ただこのことにて過ぎぬ。身の上をのみする日記には，入るまじきことなれども，かなしと思ひ入りにしもたれならねば，しるしおくなり。

中巻　安和二年三月二五・六日の条

ここでは，執筆している自身の意識に戻って，その時点を基点としてものを述べようとしているからこそ「き」が用いられているわけで，執筆者としての意識，対読み手意識ゆえに，通常いわれるところの，直接体験過去の「き」が使用されていると考えられ，以上の会話文における「き」の使用原理を裏付けることになると思われる。

以上のように考えると，会話文ではない『古今和歌集』詞書中に見られる「き」に対しても説明が付く。『古今和歌集』詞書中に「き」は六例あり，そのうち貫之歌の詞書に直接体験過去の

用法の「き」が五例使用されている。この「き」の用例は，書かれたものであるのに直接体験過去の用法であるのは奇妙であるかも知れないが，詞書の体裁が編者らから天皇に向けてものを申し上げる体裁になっていることを考慮すると，会話文中でなくても「き」が直接体験として用いられていることに支障を生じないであろう。(いわば『古今和歌集』詞書のこの五例は対聞き手を意識している点で明石入道の消息と同じ性質を帯びていることになる。あと一例は編者らが関わらない例で，語られている出来事以前に生じた出来事について触れる際の「き」である。(『古今和歌集』詞書の性質については片桐洋一「古今和歌集の場（上)」1979「文学」八月号，参照。)

二節で『万葉集』における「き」の用法を，平安時代の「き」の用法に及ぼすことの危険性を述べた。しかし，以上のような，会話文に置ける「き」の理解の仕方は，上代における「き」の用法と相入れないものではないと考えている。原田芳起は，通時的な助動詞の意味の変遷を考えるべきだとして，「けり」について元来は「連続的過程を表現する存在態・継続態」の用法のみであった（この考え方も詳細は当概論文にあたっていただきたいが，先掲した竹岡や塚原の論と相入れないものではないと本論では理解している）が，伝承を伝える際に用いられること（いわゆる伝聞過去）が時代が下って，巻三「博通法師紀伊国に往き三穂の石屋を見て作れる歌」や巻九の高橋虫麻呂「上総の末の珠名娘子」「水江浦島子」「葛飾の真間娘子」「菟原処女」といった伝説歌あたりから始まってきたと述べている（「語法と文体」1957「樟蔭文学」9)。この考え方と本論で述べてきた会話文における「き」の用法確認とは実は齟齬しない。二節に掲げた『万葉集』の「き」の用法は確かに話し手の直接体験過去の「き」ではない。他に人麻呂の長歌などにも同様の事例が見られる。歴史的な或る時期まで「き」が単純過去として話し手の現在時を基点するか否かに関わらず，つまり話し手の経験事か非経験事かに関わらず，過去の出来事であればいつも「き」が使用されるということがあったのであろう。そこに「けり」の用法が拡大される形で伝承された過去の出来事（本論の立場からすると，話し手自身にとって無関係な或る事件・出来事）に対しては「けり」が用いられるという事態が割り込み，「き」が用いられるのはもっぱら話し手が話し手としての「現在」を基点として述べることのできる過去の出来事に対してのみであることになったと考えるのである。

次に，会話文中における「き」の用法と地の文における「き」の用法とどちらが本来的な用法なのか，あるいは或る本来的な用法が「き」にはあり，会話文中における「き」の用法と地の文における「き」の用法ともにそこから派生してきた用法なのか，という問題を考えたい。

まず，地の文における「き」の使用原理を考えていきたい。先掲した吉岡の論では「当時の日本語は何よりもまず話し言葉であり，文章語はごく特殊な言語領域であったろうこと，したがって普通の典型的な用法は話しことばの中に見出だされるはず」として，「先行の記事をうける特殊用法」を，文章語ゆえの特殊用法としている。この吉岡の考えを転用すれば，地の文における「き」の用法は，文章語であるがゆえに生じるものであるとも考えられる。しかし，当時の口語をそのまま文章として書き取ったと思しい『伊勢物語』『大和物語』といった作品（先掲の山口

仲美論文参照）にも，地の文における「き」の用法は見受けられる。また『万葉集』巻九高橋虫麻呂「水江浦島子」の長歌にもこの用法の「き」が使用されている（原田芳起「「けり」の変遷—活用を中心として—」1970「月刊文法」2-7に指摘がある）。

18　（前略）　浦の島子が　鰹釣り　鯛釣りほこり　七日まで　家にも来ずて　海境を
過ぎて漕ぎ行くに　海神の　神の娘子に　たまさかに　い漕ぎ向ひ　相とぶらひ
言成りしかば　かき結び　常世に至り　（中略）　玉櫛笥　少し開くに　白雲の
箱より出でて　常世辺に　たなびきぬれば　立ち走り　叫び袖振り　こいまろび
足ずりしつつ　たちまちに　心消失せぬ　若くありし　肌も皺みぬ　黒くありし
髪も白けぬ　ゆなゆなは　息さへ絶えて　後つひに　命死にける　水江の　浦の島子が
家ところ見ゆ　　巻九1744

この長歌が文章語の意識によって書き出されているとは考えにくい。「物語中の現場」を基点とした「き」の使用不使用の理由付けに，文章語であるか否かを持ち出すのは難しいのではなかろうか。たしかに，会話中で「物語中の現場」に基づく「き」を使用しても，それは，上述してきたような，会話の現在に立脚する「き」とは実際上は識別できないわけであるから，会話文における「物語中の現場」に基づく「き」の使用は有り得ない，とも考えられ，実際現在まで管見では，会話文中における，「物語中の現場」を基点した「き」の用例を見出だせていないのだが，以上の例によって，話し言葉であるか書き言葉であるかが絶対的な基準とはならないことをまず確認しておきたいと思う。

ここまでは糸井論文に従って，発話時を視座として「できごと」を述べる場合と，素材時を視座として「できごと」を述べる場合と，いう具合に視点が移動する考え方によって論を進めてきた。この考え方でいくと先に掲げた図のように，会話文中の「き」も，「物語中の現場」を基点とする「き」も，同一の平面上で扱うのである。糸井は「日本語では，古代語，近代語に一貫して，過去の「できごと」を，常に発話時を基点にして述べたてるのではなく，「できごと＝素材」の生起する時に立ち会った視点時から，その「できごと」（素材）を叙述すること——所謂，歴史的現在（法）——が珍しいことではないからである。今まさにそのことが眼前に展開するように述べたてるのである。」と述べている（「王朝女流日記の表現機構」）。物語の語り手は，過去の出来事を，出来事そのものとして語り出し，語りつつある過去の出来事自体の中に身を浸しながらそれ以前に生じた「過去の出来事」を語るときに「き」が使用されることになると理解される。しかし，語りつつある過去の出来事自体の中に身を浸し，語りを行っている「現在」が雲散霧消してしまうということは，あり得ることなのであろうか。物語の場合はあり得るとしても，『土左日記』『かげろふ日記』『更級日記』といった作品ではどうであろう。「今まさにそのことが眼前に展開するように述べたてる」という言い方がふさわしいであろうか。通常，動詞や完了の助

動詞の終止形（基本形）が使用されていると歴史的現在である扱いがなされる。しかし「日本語の統括成分には時に関しては過去の概念を現わす方法しかなく，現在や未来については，いわば無標識（unmarked）なのである」（北原保雄『日本語の世界６　日本語の文法』1984中央公論社）とある通り，動詞や完了の助動詞の終止形（基本形）が使用されていても歴史的現在ということにはならない。『土左日記』『かげろふ日記』『更級日記』の文末には動詞や完了の助動詞の終止形（基本形）が頻出するが，「今まさにそのことが眼前に展開するように述べたて」ていることにはならないと思われる。これは，現実の会話のような「場」を想定せず，出来事を出来事のまま記録としてとどめる意味で使用されている動詞や完了の助動詞の終止形（基本形）なのである（糸井も「「歴史的現在（法）」と視点」1982「京都教育大学国文学会誌」第17号で，「動詞・完了の助動詞の終止形（基本形）＝歴史的現在」とはならないことに触れてはいる）。会話文中の「き」と，地の文中の「き」とは，同一平面上で扱わない方がよいのではないだろうか。『万葉集』に見られる，自己の体験に関わらない単純過去の用法を考えると，もともと「き」は時間軸上で出来事を認識する時制に関わる唯一の助動詞であったと考えられる。糸井の以前の主張「あるものごとの，Ａ時のＡ状態とＢ時のＢ状態とが異質なものと認識されるとき，Ｂ時を基点にしてＡ時をＢ時から切り離して（つまり，「過去時」として）認識されていることを示す助動詞が「き」であった」（「源氏物語と助動詞「き」」）と考える所でとどめて，「視点」の考え方は導入せず，今述べている出来事に対してそれ以前に生じた出来事であることを明示しようとして相対的に使用されるものが，地の文における「き」と考えてよいのではなかろうか。出来事Ａのことを述べている際にそれ以前に生じた出来事Ｂを，出来事Ａに比して相対的に過去時の出来事であることを示すために「き」が用いられていると考えるのである。先に述べたように，会話文については話し手の，話している「現在」が基盤として確立されるが，地の文においては，出来事Ａと出来事Ｂとの相対関係だけが問題とされ，時制に関わる唯一の助動詞「き」が使用されることによって，出来事Ａと出来事Ｂとの前後関係が示されるのである。以上のように，会話文における「き」と地の文における「き」とは本来的な意味は同一であっても，使用の場面に従って異なる性質を帯びた二用法であるといえるのではないだろうか。

五

以上のように考えきたると，教室などで平安時代の作品に現われる「き」を扱う際には，大きく二つの立場を取れば良いことが分かる。

一つは従来言われている直接体験過去説に基づく理解である。ただしこれは発言部分に限られる（付説した『枕草子』『紫式部日記』はこの限りではないし，『かげろふ日記』などには例外的な使用が見受けられることも考慮したい）。逆に言えば，発話部分で用いられている「き」であれば，直接体験過去であるとほぼ言える。

もう一つは再述の用法を拡大した，いま現に述べている事件中に基づいてそれ以前の出来事に

ついて言及する際に用いられる「き」である。ただしこれは物語・日記の地の文で用いられている「き」について言える。逆に言えば物語・日記の地の文で用いられている「き」であれば，「物語中の現場」からの過去であるとほぼいえることになる。この「き」は厳密には，「物語中の現場」との対比の上での過去といった言い方をしなくてはならないのかもしれない。また語り手，書き手の立場からすると，過去に起こった出来事を話しているときに，それ以前の出来事について話すということになるのだから，便宜上「大過去」という呼び方をしても良いように思われる。

高校の教室の現場においては平安時代の作品にあたる際，以上の二通りの理解で対応すればよいのではないだろうか。例えば，三節で掲げた「…この皇子三つになりたまふ年，御袴着のこと，一の宮の奉りしに劣らず，内蔵寮，納殿の物を尽くして，いみじうせさせたまふ」という「桐壺」巻冒頭近くの「き」も，いま現に述べている事件時に対比してそれ以前の出来事について言及する際に用いられる「き」である，あるいは単純に「大過去」であるとして紛れることはないであろう。すなわち光源氏三才の袴着の儀式について述べるにあたり，それ以前行なわれたその兄の袴着の儀式について，相対的に以前のこととして触れるために「き」が用いられているのである。

以上，問題点の多い「き」を授業で扱う，大まかな扱い方を示すと同時に，「き」の理解の大まかな方向性を示してみた。とにかく従来の「き」の意味認定には，通時的な観点，書き言葉・話し言葉の別を視野にいれた観点が導入されず，大袈裟に言えば『万葉集』から『徒然草』までの時代差などが考慮されないで「き」の一義的な意味を探る試みがなされていたわけで，雑駁な論ながら「き」の問題解決に幾分かでも貢献できれば幸いである。先行所論の理解不足がないか不安である。大方の御批正を賜りたい。

本文としては以下のものを使用した。

愚秘抄—群書類従本・難後拾遺抄—八代集全註本・万葉集—日本古典集成本・土佐日記—日本古典全書本・竹取物語伊勢物語大和物語平仲物語—日本古典文学全集本・かげろふ日記—全対訳日本古典新書本・落窪物語—日本古典集成本・宇津保物語—校注古典叢書本・枕草子—日本古典集成本・源氏物語—日本古典文学全集本・和泉式部日記—岩波文庫本・更級日記—岩波文庫本・徒然草—全対訳日本古典新書本

（付説１）　糸井は『源氏物語』地の文における「き」について「現在語っている事柄の存在の意味を問い詰める時，先行する事実との関係を想像しなければならなかった源氏物語作者紫式部の語りの方法」（「源氏物語と助動詞「き」」）と述べている。言い方を変えると，『竹取物語』で

は物語を展開する上で，現に述べている出来事だけを扱う姿勢が見られ，現に述べられている出来事以前に生じた出来事に言及するにしても，それはほとんど物語中だけで充足するのに対し（だから「き」の用法が「再述」だけに限られる），『落窪物語』や『宇津保物語』では先に述べた出来事だけでは足りず，あったと想定され，そして物語中で今まで触れられていなかった，それ以前の出来事に言及する必要がわずかに出て来る，そして『源氏物語』では，あったと想定される，そして物語中では今まで触れられていなかった，それ以前の出来事に言及する必要が非常に生じてくる，それが『源氏物語』の物語としての性質であるということである。これは『源氏物語』を考える上で非常に重要な指摘であると言ってよい。

ただし，「物語中の現場」以前の出来事に言及する際にも，「蓬生」巻巻頭・「関屋」巻のように「き」が頻用される場合と，「玉鬘」巻での，玉鬘が九州の地で育ち，京に上って右近と巡り逢うあたりのように「けり」が頻用される場合と，両事態がある訳で，それは「物語中の現場」以前の出来事を語り手がどのように認識しているかに，左右される。

（付説２）　三節での「き」の用法を考慮すると，「物語音読論」を深く考えることも可能となる。「物語音読論」中の，第一の作者にあたる，光源氏に近侍した女房の存在を確定するためには，直接体験過去の「き」の使用が『竹取物語』蔵持皇子の体験談や『源氏物語』「帚木」巻の雨夜の品定めにおける人々の体験談，『大鏡』における大宅世継や夏山繁樹の発言部分などと同様に大変多いことが必要となる。そうでなければ『源氏物語』の文章は「第一の作者」の言葉をそのまま書き出したものではなく，「第二の作者」「第三の作者」の手を経てのものとなり，「第一の作者」の存在自体が疑わしいものとなってしまう。草子地の部分から或る程度『源氏物語』の「語り」の多層性をほのめかす擬態を指摘することはできても，本文からは玉上がいうほどに細かい規定はできないのが実情ではないか。その叙述の基本的性格としては『竹取物語』『落窪物語』『宇津保物語』からさほど遠くないというのが実情なのではなかろうか（同様に草子地の面からの玉上への反論として，中野幸一『物語文学論攷』1971教育出版センター。吉岡　曠「源氏物語の語り手と書き手と朗読者と」1977「国語国文」46-3を参照のこと。ただし吉岡のこの論文中での「き」の理解の仕方には本論の立場からは従えない）。

（付説３）　『枕草子』地の文における「き」も興味深い資料を提供してくれる。地の文に「き」は全部で二四八例使用されている。しかしその使用のされ方は，統一的でない。いま現に述べられている出来事より以前になされた出来事について述べるときに使用されている「き」と，執筆時を起点とする「き」と，が混在するのである。そのことに考察を加えると『枕草子』という作品自体の持つ特徴が明らかになると思う。とくに本論の立場からすれば，執筆時を起点とする「き」が文章語の中に使用されていることが特異である。『枕草子』の「き」については近年松本邦夫「枕草子の『回想』―＜はなし＞と＜かたり＞の位相―」（1993『古代文学研究　第二次』二号）などを見るが，文章論的視点を欠いており，妥当な所論とは思えない。別論を準備中である。

（付説４）　「き」の使用実態を考慮するとその文章のあり方がますます奇妙さをましてくるのが，『紫式部日記』である。周知のように『紫式部日記』はその内容からして大きく彰子の第一子の誕生と祝いごと・消息文・「十一日の暁…」の段など・第二子の誕生後の祝いごとの部分に大別され，作品の統一性の有無が問われ，文体の在り方が取り沙汰されて来た。

「侍り」の使用からしてその文体はおよそ消息文に準ずることが指摘されて来た。また「き」に関しては，糸井（「王朝女流日記の表現機構」）が指摘するようにその九一例ほとんどが執筆現在を起点とする形で「き」が用いられている（「き」の使用状況からはこの作品は統一性云々とは無関係に同一平面上で扱えるのである）。「はべり」「き」の使用からは『紫式部日記』の文章のあり様は『土左日記』『かげろふ日記』とは性格を大いに異にし，先に挙げた『源氏物語』「若菜上」巻にある明石入道の消息などといった，消息文と類比的である。『紫式部日記』を，消息文として捕らえる従来からの見方におよそあやまりはないといえる（ただし「き」は「はべり」に伴うことが多く，行事自体を記録するときではなく，その周辺に位置する紫式部をはじめとする女房たちの行為などを叙するときに用いられる）。

しかし，その文章を考える際，問題となってくるのは係助詞「なむ」のあり様である。明石入道の消息を見ても分かるように，消息文あるいは会話文に「なむ」は頻出する（四節で掲げた，宮坂和江論文・森野崇論文参照のこと）。しかし，『紫式部日記』には「なむ」は地の文中三例しか用いられていない。第一子の誕生部分「十一日」の条に二例，消息文といわれている部分にはたった一例であり，むしろ「ぞ」「こそ」の使用の方が目立つ。『紫式部日記新釈』「解題に代えて」では，「侍り」の考察を通して，『紫式部日記』は語り掛ける特定の相手の相手を持たず，書簡体に仮託した，紫式部自身の内面に向けての作品である，としている。「なむ」の使われ方もその線から理解されるものと考えられる。

（付説５）　九〇〇年から一〇五〇年くらいに成立したと思しい物語類の中で，地の文中に執筆時を起点とする「き」を見出だすことは容易ではない（『落窪物語』冒頭一文での「き」という，説明に窮する例を除いての話だが）。周知のとおり物語は「けり」叙述が基本であり，伝承の形が物語の常であるということなのであろう。しかし，そうした目で『堤中納言物語』中の『思はぬ方にとまりする少将』の地の文の「き」をみるとその使用法は特異である。そこでは（特に冒頭あたり），執筆時を起点とする「き」が叙述の基本となっている。この物語は，だれかが自己の見聞きした事件報告の体裁をなしているわけで，物語史上特異な存在である。